

ちこそ懇願であり、自分自身の弱さから、自分が他人やものに依存しているという感情をもつが、やがて奉仕してもらうようになると、そこからはほんたいに命令と支配の観念が生まれがちだからである¹³⁾。しかし子どもはおとなの主人ではないし、ものは子どもの言うことがわからない。それゆえ子どもにたいしては早くから、人にもものにも命令を下さないようにしつけていくことがたいせつだということになる。ルソーは子どもがなにか目に見えるものをほしがるような場合、もしもわれわれがそれを与えてもよいとおもったならば、子どもにそれを持ってきてやるよりも、子どもをそこへ連れていくといったような心がけが必要だとしている¹⁴⁾。

しかもこうしたやり方はこの時期における子どもの心身の発達の見地からもたいへん理にかなったことなのだ。子どもは口をきく前から、人の言うことを理解する前から、すでに多くのことを学ぶものであるが、それはすべて子どもなりの経験、すなわちかれらの感覚を通してである。ところで感覚は子どもの知識の最初の素材となり、適当な順序にしたがって経験させておこならば将来記憶がそれを同じ順序で悟性にたいして提供するように準備することになるであろう。それゆえ感覚の段階でまず感覚とその感覚を生じさせたものとのあいだの関係を的確に把握させるということには重要な意味があることになる。ところでわれわれ人間はほんらい、われわれ自身の運動によって始めてわれわれ以外のものが存在することを知り、また同時に空間の観念も獲得していくのであるが、生まれてまもない子どもは歩くこともものを握むこともできないほど無力である。それゆえこうした理由からもまず最初のうちはできるだけ子どもを動かしてやり、またいろいろなところへ移動させて場所が変わったということを感じさせながらものに近づけてやるといううえのようなやり方は大いに必要だということになるのである¹⁵⁾。

この時期の子どもにきかせるべきことばもうえのような状況と考え合わせるならばおのずからあきらかである。「子どもには最初、やさしい、はっきりした音声をたまに聞かせ、同じことばをしぼしぼくりかえし、またその音声があらわすことばはすぐに子どもに見せられる感覚的な対象にだけ関連することばであるようにしたいものだ」とルソーは述べている。またルソーはこのあとすぐに次のような痛烈な皮肉のこもった文章を続けているのであるがこれもまた批判をとおして自説を展開していくというルソーの方法の一面を示すものである。「わたしたちが意味もわからないことばで容易に満足する困ったくせは、人が考えているよりもずっとはやい時期にはじまる。生徒は教室で先生のわけのわからない駄弁に耳を傾けている。それは、産衣にくるまれていたところに乳母のおしゃべりを聞いていたのと同じことだ。言われていることをなにつ理解できないように育てるといのは、まことに有益な教育法だとわたしには思われる」と¹⁶⁾。

二、3歳～12歳

a. 消極的な教育

ものがいえるようになると子どもはそれまでほど泣かなくなってくる。ことばで苦しいと言えるようになれば泣き声でそれを言う必要がなくなるわけではそれはきわめて当然な変化だといえる¹⁷⁾。しかしこのことに加えて子どもにおけるもう一つの発達が子どもの泣く必要をより少なくしていることも否定できないであろう。それはかれら自身にも力がついてくるということ、そして自分で多くのことができるようになるにつれてそれだけ人にたよる必要がなくなってくるということである。また自力の発達とともにそれを正しく使うことを可能にする知識や自己同一性の意識が発達してくる。ルソーは述べている、「この第二の段階において、個人の生活がはじまる。ここで人は自

13) Cf. *ibid.*, p. 287

14) Cf. *ibid.*, p. 287

15) Cf. *ibid.*, p. 287

16) *Ibid.*, p. 293

17) Cf. *ibid.*, p. 299